

山陰地方の中山間地域における 高齢者の住居環境について

小林 定教¹⁾, 岡本 英生²⁾

¹⁾島根大学総合理工学部 材料プロセス工学科

²⁾山陰水道工業株式会社

Concerning living environment for the aged in a mountainous region of the Sanin district

Sadanori KOBAYASHI¹⁾ and Hideo OKAMOTO²⁾

¹⁾ *Department of Natural Resources Process Engineering,*

Interdisciplinary Faculty of Science and Engineering, Shimane University

²⁾ *Sanin Suido Kogyo Co., Ltd.*

Abstract

In towns and villages of a mountainous region the aged have come to occupy an increasingly larger percentage of the total population and are getting to be the support in a local community due to the outflow of the young and the middle aged population. It seems that the aged and the middle aged who support the aged wish to continue to live a self-supporting life in the house and the region they are accustomed to based on close communication and exchange with their neighbors. However, it is often difficult to maintain a household of the aged, especially in winter in the mountainous region.

This survey aims to obtain the data to help for building the living environment of the aging society which will be further worth living through the questionnaires on the present living situation of the aged, their living environment, the way of living in winter as well as how to create and live a self-supporting life in future on the mountainous region of Shimane prefecture which has a high aging rate of the population.

1.はじめに

中山間地域の町村においては、若者、中高年者の都市への人口流出などにより高齢者人口の占める割合が一段と大きくなり、高齢者が社会の担い手となりつつある。高齢者や、高齢者の生活を支える中高年の人々は、今後も、地域の交流の中で住み慣れた家や地域で自立して生活することを望んでいると思われるが、高齢者世帯にとっては、特に冬期における生活維持に困難が予測される場合がある。このため、1)ホームヘルパー、ボランティアなどの人が定期的には高齢者の家を訪れ援助する、2)一定の場所に高齢者の人が集まり共に居住する、3)老人ホームなどの施設に入居する、4)子どもの家に移り住む等の対策が考えられるが、生活環境の急変は高齢者にとって望ましいものではない。また、降雪期には高齢者が屋外に出ることは勿論、他の人が援助のために家を訪れることも困難になる。このような状況の中で、中山間地域

に住む高齢者は、都市に住む高齢者とは異なる様々な不安を抱いていると思われる。

本研究では、高齢化率の高い島根県の中山間地域を対象に、高齢者の生活の現状、住環境、冬期の住まい方、ならびに今後の自立した生活づくりについてアンケート調査を行い、生き甲斐のある高齢社会の住まいづくりに役立つ資料を得ることを目的とする。

2. 調査概要

2.1 調査対象地域の概要

島根県の平成12年の老年人口比率は25.2%と全国一位で、全国平均の17.7%より7.5ポイント上回り、10年以上早く高齢化が進行している。

調査対象地域は、広島県との県境に近い島根県の中山間地域で、老年人口比率の高い邑智郡羽須美村と那賀郡

弥栄村である。両村とも、旧村の役場所在地の地勢は穏やかであるが、周辺の集落は地勢の厳しい所が多い。

a) 島根県邑智郡羽須美村

羽須美村は、1957年2月に口羽村、阿須那村の合併により誕生し、下口羽地区、阿須那地区の2カ所の中心地域がある。山岳が多く、その谷間に55の集落が点在している。平成12年の人口は2,078人、世帯数840戸、人口密度28.1人/km²である。老年人口比率は48.3%で島根県内で最も高く、全国平均値の17.7%より30ポイント以上高い。

村内には社会福祉施設、特別養護老人ホーム各1箇所があり、社会福祉施設には高齢者用の居室(個室、台所、菜園付き)8戸がある。また、医療施設として診療所、医院、歯科医院各1カ所がある。病院などのある最寄りの都市は、約19km離れた広島県三次市である。

b) 島根県那賀郡弥栄村

弥栄村は、1956年8月に安城村、杵束村が合併し誕生した。県西部の中国山脈の背嶺に沿った台地に位置し、村役場のある中心地域においても海拔約400mあり、周辺の谷間に33の集落が点在している。平成12年の人口は1,789人、世帯数708戸、人口密度17.0人/km²で、老年人口比率は、40.4%である。

村内には、特別養護老人ホーム、老人ホーム各1箇所と、医療施設として、診療所、医院、歯科診療所各1箇所がある。村の中心地域から離れた田野原地区に冬期一時的に入居出来る「ふれあい共同住宅」(6戸)があり、施設の維持管理は地区住民により行われている。最寄りの都市は約16km離れた県内石見地方の拠点、浜田市である。

2.2 調査方法と内容

調査は、羽須美村・弥栄村役場の協力を得て、各集落の役員を通してアンケート用紙を配布、回収する託送調査法によった。回答は個人の考えを記すよう依頼し、プライバシー確保のため記入後密封したものを回収することとした。

調査内容は、中山間地域における高齢者の日常生活に関する問題、特に冬期の生活における問題、現状の評価、および高齢者用施設に関するもので、その概要を下記に記す。

- a) 中山間地域における高齢者の生活上の問題
- b) 住んでいる村の生活に関する評価
- c) 日常、および冬期の生活に関する問題点
- d) 将来の生活について
- e) 高齢者を対象とした施設について

3. 調査結果と検討

調査結果の検討に当たっては、羽須美村・弥栄村両村全体(以下両村全体という)を中心に図示し、村役場などのある中心地域と民家の点在する周辺地域における違い(以下両村中心地域、両村周辺地域とし、その比較を地域別とする)については、その差が顕著にみられる事項について述べる。

アンケートの配布数、回答数等は次の通りである。

アンケートの回答数(回答率)/配布数

- 1) 両村全体 419通(62.6%)/669通
- 2) 両村中心地域 50通(68.5%)/73通
- 3) 両村周辺地域 369通(61.9%)/596通

3.1 回答者の属性

両村の回答者の性別・年齢、職業を図1、図2に示す。

3.2 中山間地域における高齢者の生活上の問題点

3.2.1 村の生活上の問題に対する関心度について

図3は、現在地方の村で問題になっている7項目についての関心を5段階評価したものである。「過疎化」、「高齢者だけの暮らし」、「高齢者の一人暮らし」の3項目が「非常に高い」、「高い」の両者を合わせて59%以上と特に高く、「子供家族との同居」に対する関心は17%と比較的低い値である。

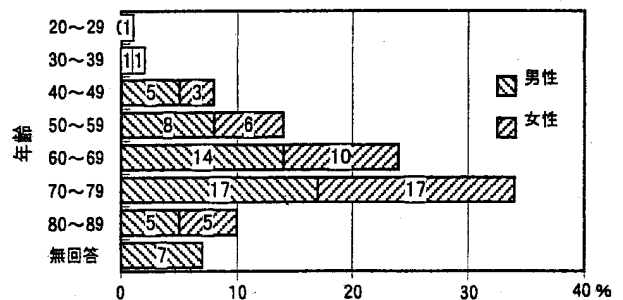


図1 回答者の性別・年齢

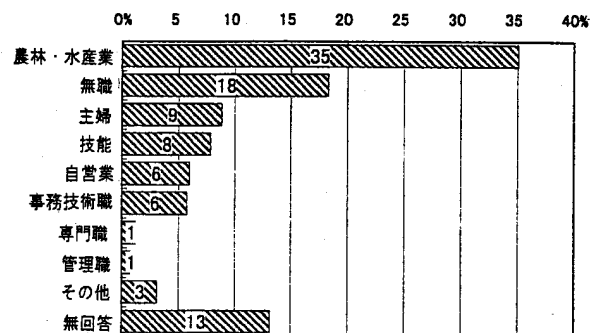


図2 回答者の職業

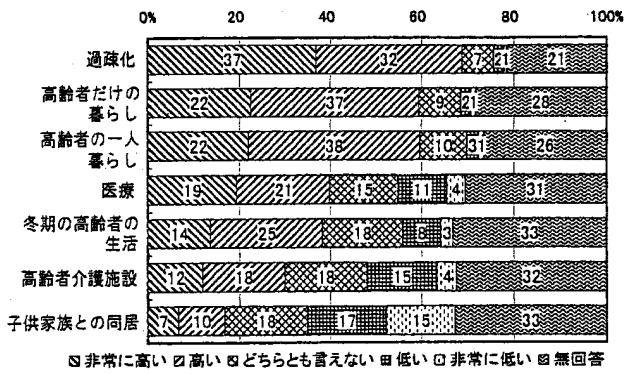


図3 村の生活に対する関心度

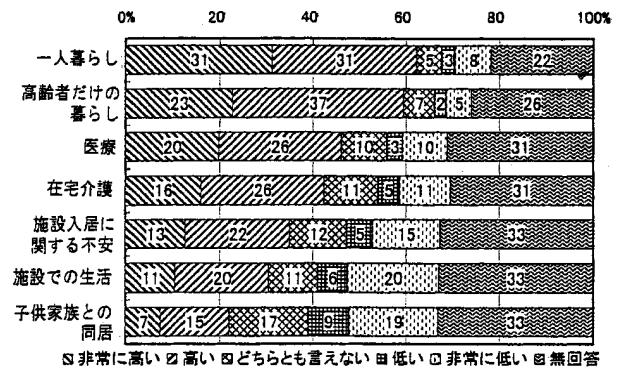


図4 高齢者になったときの日常生活での不安について

地域による差は大きくないが、予想外に中心地域の方が「過疎化」(76%)、「高齢者の一人暮らし」(74%)、「高齢者だけの暮らし」(70%)に対して高い関心を持っている。これは、周辺地域の人々の方が現在の生活を守り自力で生き抜こうとする気力が強いと推測される。

3.2.2 高齢者になった時の日常生活の不安について

図4は将来の不安に関する7項目に対して5段階評価したものである。「高齢者の一人暮らし」、「高齢者だけの暮らし」への不安が「非常に強い」、「強い」の両方で62%と高く、「子供家族との同居」については22%とあまり不安に感じていないことが伺われる。

3.3 村における生活について

3.3.1 村での在住年数

在住年数は60年以上が42%で、多くの人が生後この村に住み続け、村への愛着心が強いと推測される(図5)。地域別では、周辺地域の方が長く同じ村に住んでいる人が多い。弥栄村の中心地域では20年未満が58%を占め、行政による住居の供給などに伴い若い世代、および他町村より移ってきた人が比較的多いことが伺われる。

3.3.2 一緒に住んでいる家族構成

家族構成は、「夫婦二人暮らし」(35%)が多く、つぎに「夫婦二人と子どもまたは子ども世帯」(16%)、「女性一人暮らし」(15%)と続いている。「子どもまたは子ども世帯と同居」している人は合わせて23%で、子どもの多くが他町村へ流出していることが分かる(図6)。周辺地域では「男性一人暮らし(4%)」、「女性一人暮らし(16%)」の人が20%おり、中心地域(12%)より多

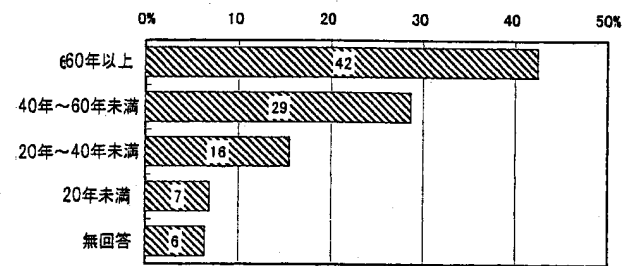


図5 村での在住年数

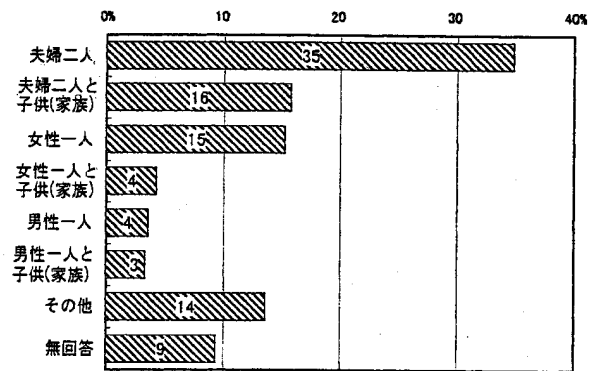


図6 一緒に住んでいる家族構成

い。

3.3.3 住まいの総合評価

図7に現在の家に住み続ける希望について、図8、図9に、それぞれ「住み続けたい」「住み続けたくない」理由について示した。理由は複数回答で、それぞれ「住み続けたい」、「住み続けたくない」と答えた人のみを対象とした。

両村全体では「住み続けたい」人が68%と多く、「住み続けたくない」人は21%である(図7)。これは地域別でも大きな差はない。

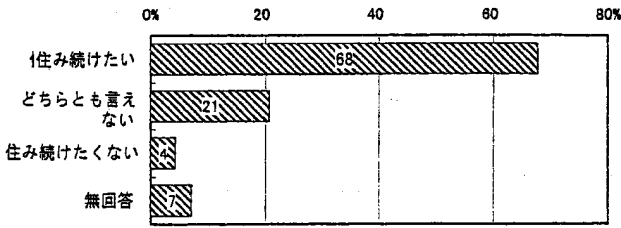


図7 現在の家に住みたいかどうか

「住みたい」理由としては、「今の生活が好き」(49%)、「今の家が好き」(37%)、「当地の風土が好き」(36%)、「近所の人との交流がある」(35%)が上位を占めている(図8)。地域別にみると、中心地域では「日常生活が不便でない」(62%)、「交通の便が比較的よい」(26%)の割合が高く、周辺地域における生活の厳しさを示している。しかし、周辺地域の人達は、日常生活は不便であるが、現在の土地、家に住みたいと思っている。

一方、「住みたいくない」理由としては、両村全体で、「交通が不便」(67%)、「冬期の生活が不安」(67%)、「日常生活が不便」(50%)、「今の生活が不安」(50%)の4項目で50%を上回っている。地域別では、「今の生活が不安」と答えた人は、周辺地域(57%)の方が中心地域(25%)より多い。

総合的に現在の生活が好きで、いまの家、土地を離れたくないという気持ちが伺え、これが今後も村に住み続ける良い要因になると考える。

3.4 村における日常生活と問題点

3.4.1 日常生活の交通手段と時間

日常生活に必要な買物をする「店」までと、最寄りの「医院」までの交通手段を図10、図11に示す。

「店」への交通手段は、両村全体で「自動車」(53%)が多い。これは両村が中山間地域に立地しているためであろう。地域別にみると、中心地域では「徒歩」(54%)が多く、周辺地域では「自動車」(53%)が多い。また、中心地域では「訪問販売」が0%であるのに対し、周辺地域では7%ある。これは中心地域では店が比較的近くにあり徒歩で行くことができるが、周辺地域では自動車に乗れない人が訪問販売を利用していると考えられる。また、自動車を利用する人が多いことから、降雪時には日常の買物さえ困難になることが推測される。村別の比較では「訪問販売」の利用は、羽須美村周辺地域で多いが、弥栄村ではない。

「店」までの平均所要時間は、両村全体で18分、中

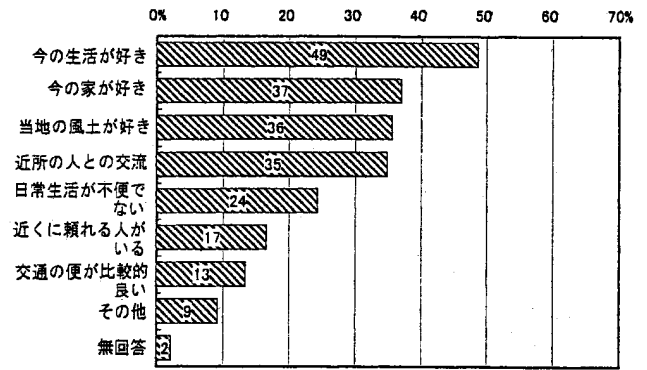


図8 現在の家に住みたい理由

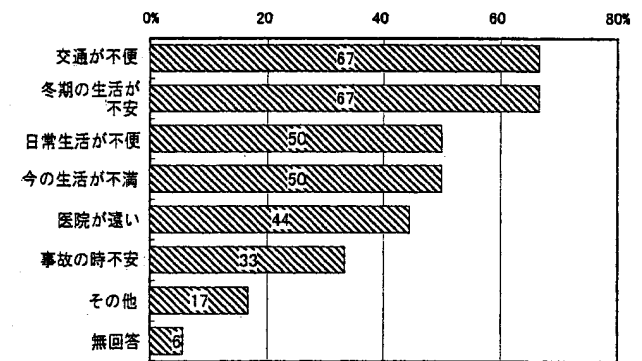


図9 現在の家に住みたいくない理由

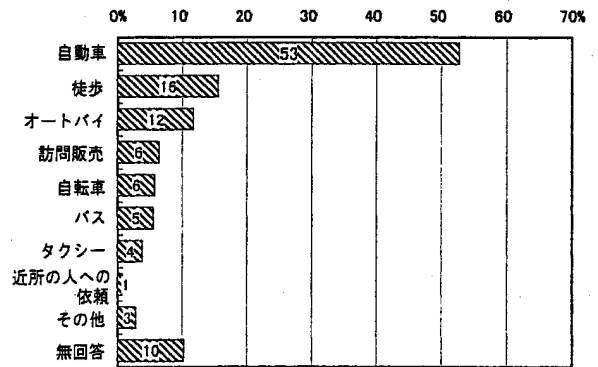


図10 買い物に行く手段

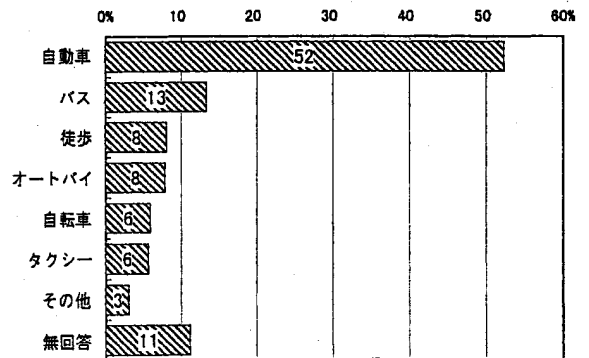


図11 医院への交通手段

心地域で13分、周辺地域で18分である。

村別にみると、弥栄村では地域による差はないが、羽須美村では中心地域の12分に対し周辺地域では20分と長い。

「医院」までの交通手段も「自動車」が52%と多い。「バス」(13%)で通院する人もいるが、中心地域では「徒歩」(28%)が多く、村別でも「店」と同じ傾向がみられる。所要時間は、両村全体で24分、中心地域で28分、周辺地域では23分と中心地域の方が長い。村別にみると、弥栄村では中心地域の方が所要時間が短い、羽須美村では32分と長い。これは羽須美村中心地域の人には徒歩で通院する人が多いためと考えられる。

3.4.2 降雪時期の生活上の心配事項(複数回答)

降雪時に不安の多い項目は、「病気」(53%)、「玄関から公道までの除雪」(37%)、「買い物」(23%)、「屋根の除雪」(21%)である(図12)。

地域別では、「特に心配はない」が中心地域の32%に対し周辺地域では14%と少ない。

村別にみると、「特に心配はない」は羽須美村の21%に対し弥栄村では11%である。「玄関から公道までの除雪」に対する不安は弥栄村の方が高い。「病気」に対する心配は当然予測されることであるが、「除雪」に対する不安も多い。除雪作業は力を要し危険を伴うため、高齢者にとっては大きな不安材料となっている。

3.4.3 生き甲斐、楽しみ(複数回答)

生き甲斐、楽しみとしては、「仕事」(47%)、「人との交流」(41%)、「テレビ・ラジオなど」(39%)、「家庭菜園」(31%)、「家族」(30%)、「趣味」(24%)、「旅行」(19%)と様々なものがあげられている(図13)。

中心地域の方が生き甲斐、楽しみの種類が多い。3.3.3において、「住み続けたい」理由として「近所の人との交流がある」が多かったように、このことが生き甲斐となっている人が多いことが伺われる。

3.5 現在の住まいについて

3.5.1 自宅(母屋)の築後年数

自宅の築後年数の平均は、両村全体で57年、地域別では中心地域が50年、周辺地域が58年である。

3.5.2 高齢になってから改修した箇所(複数回答)

改修箇所としては「浴室」「便所」が31%、「台所」

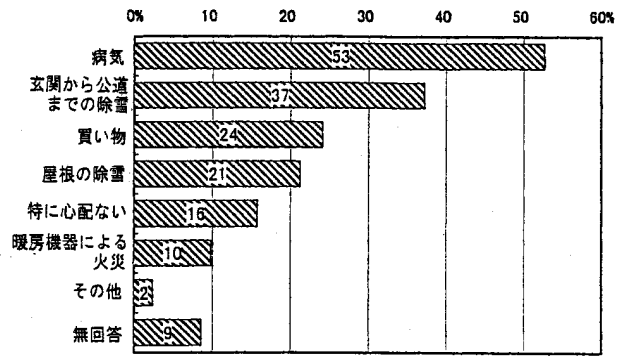


図12 降雪時期の生活上の心配事項

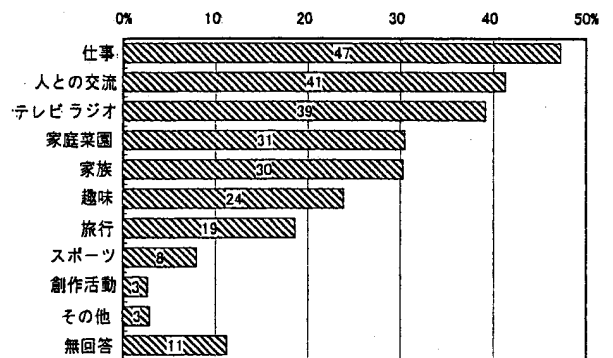


図13 生き甲斐・楽しみ

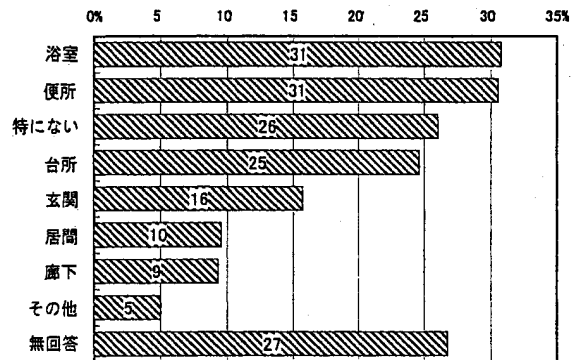


図14 自宅で改修した場所

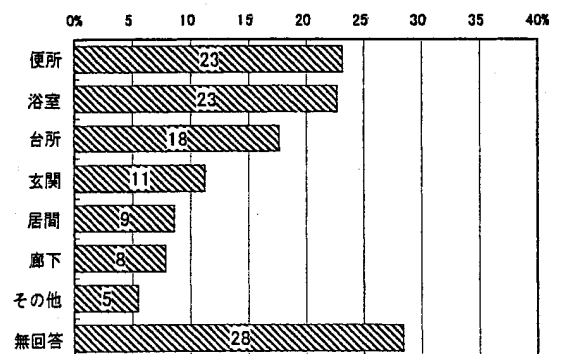


図15 自宅で改修したい場所

が25%と多く、「水周り」が改修の対象となっている(図14)。また、「特にない」と答えた人は26%であった。地域別にみると、周辺地域の方が改修した箇所が多い。これは前項の築後年数によるものと考えられる。

3.5.3 今後、改修したい箇所、室内環境について (複数回答)

今後改修したい場所は、前項同様、「水周り」への関心が強く、「便所」「浴室」(23%)、「台所」(18%)、「玄関」(11%)、「居間」(9%)、「廊下」(8%)の順で、これら全てにおいて「段差」、「設備」の改修希望が多い(図15)。

改善したい環境については「特にない」が32%と多いが、改善項目としては「暖かさ」が26%で最も多い。ついで、「すきま風」(15%)、「段差」(14%)、「明るさ」(13%)、「夏の涼しさ」(11%)と続いている(図16)。

「暖かさ」や「すきま風」をあげる人が多いのは、築後年数が長く気密性の低い住宅が多いためと考えられる。「段差」についても、築後年数が長いと玄関等に大きな段差がついている住宅が多く、回答者の年齢(図1)を考えると当然のことであろう。

3.5.4 暖房機器と室内の温熱環境評価 (複数回答)

暖房機器としては、「ストーブ」(85%)、「こたつ」(74%)が圧倒的に多く、次いで「暖(冷)房機器」(19%)である(図17)。「暖(冷)房機器」は、地域別では中心地域の方が、村別では羽須美村の方が多く使用している。

図18は、居室の暖房効果について表したものである。採暖により「暖かい」と思う人が59%いる一方、「少し寒い」(23%)、「寒い」(4%)人が合わせて27%いる。これは3.5.1の築後年数や3.5.3の改修したい箇所の「すきま風」からも分かるように、昔からの住宅が多いため、気密性が低く、暖房をしても暖まりにくいものと考えられる。地域別では中心地域の方が「暖かい」と答えた人が多い。

3.6 将来の生活について

3.6.1 高齢者世帯になった時の暮らし方

図19は将来、高齢者世帯になった時、「子ども(身内)と一緒に生活することを勧められたらどうするか」について纏めたものである。

「分からない」が33%で、将来のことは漠然としか考えられない人が多いことが伺われる。「完全同居」(28%)、「独立型同居」(11%)と同居を希望する人は合わせ

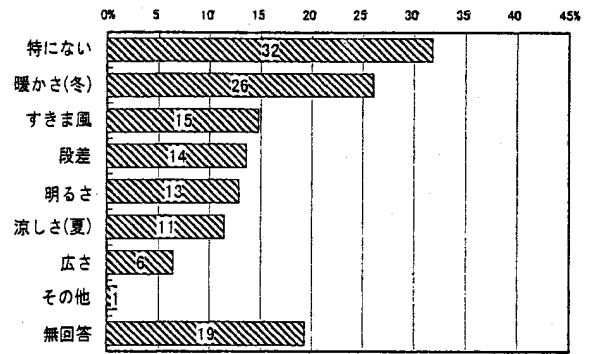


図16 改善したい室内環境

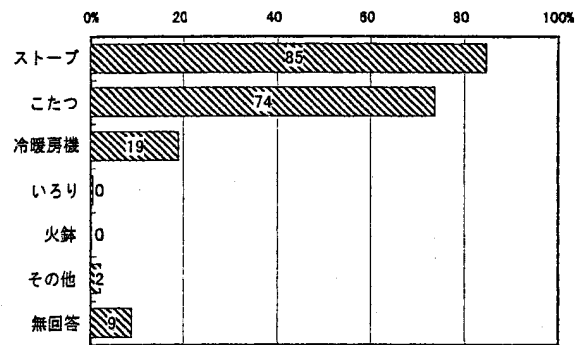


図17 日常よく使用する暖房機器について

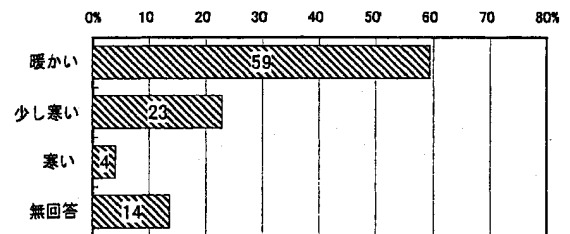


図18 冬の室内温熱環境

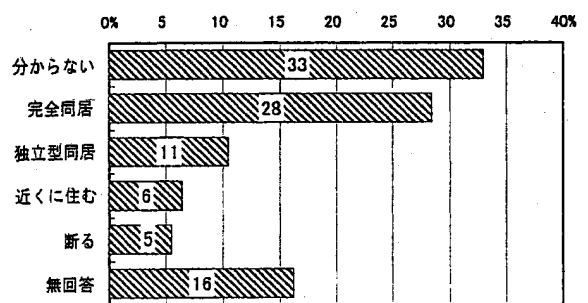


図19 将来、夫婦、あるいは一人暮らしになった時の暮らし方

せて39%と予想外に少なく、「断る」と答えた人は5%であった。「断る理由」としては、「自分の力で」「気兼ねせずに」の生活(57%)、「現在の家での生活」(38%)、「人

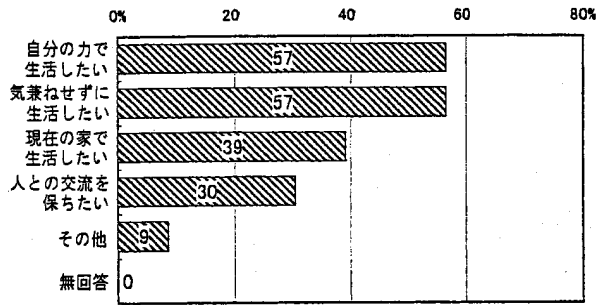


図20 子供との生活を断る理由

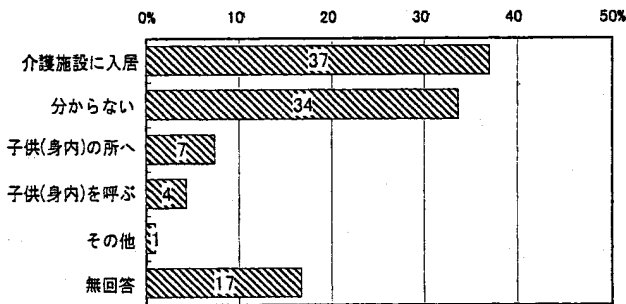


図21 一人暮らしが困難になった時の暮らし方

との交流」(30%)があげられ、現在の生活維持を希望している人が多い。(図20)。

3.6.2 一人暮らしが困難になった時の暮らし方

図21のように「介護施設に入居する」(37%)、「分からない」(34%)で71%を占める。「子ども(身内)の所へ行く」(7%)、「子ども(身内)を呼ぶ」(4%)は合わせて11%で、子どもと住みたいという願望は低くなっていると思われる。これは、子どもの意見を尊重しようとする情勢と、前項の回答のように考える人が増えた結果であると思われる。

「介護施設へ入居する」と答えた人に対し、希望する地域について纏めた(図22)。「地元の施設」を希望する人が67%で圧倒的に多く、つぎに「子どものいる地域」(14%)、「地域にこだわらない」(13%)である。

3.6.3 冬期のみ入居できる施設に対する評価

「分からない」(36%)と答えた人が多いが、「強く希望する」(7%)「希望する」(19%)と回答した人も合わせて26%と比較的多い。「希望しない」と答えた人は15%である。(図23)

3.7 高齢者施設に対する評価

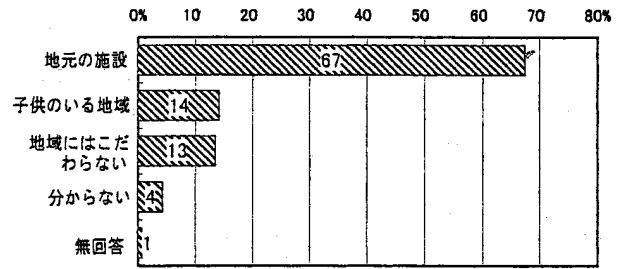


図22 どの地域の施設を希望するか

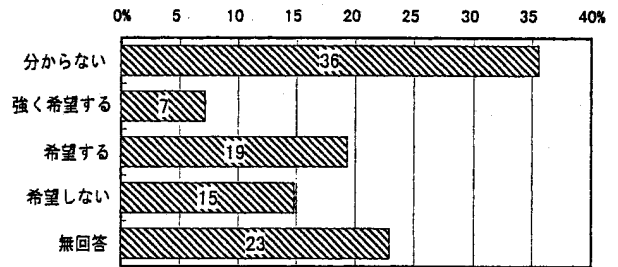


図23 冬期のみ入居施設に対する評価

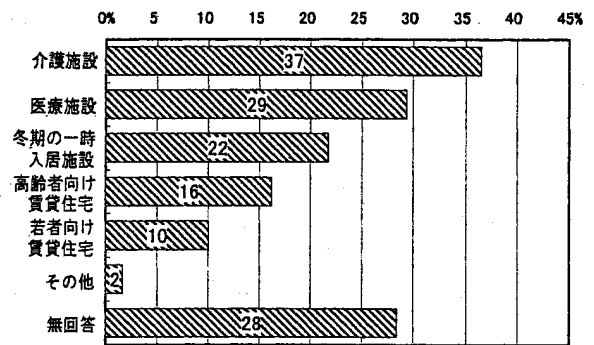


図24 村にどのような施設を希望しているか

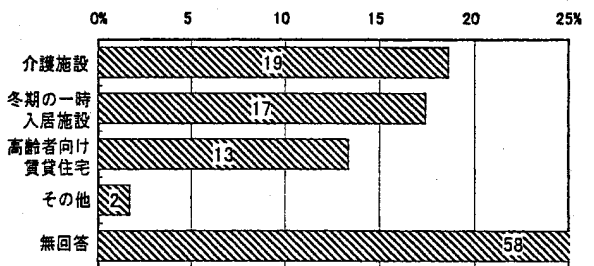


図25 入居を希望する住宅・施設について

3.7.1 現在居住する村に希望する施設(複数回答)

希望する施設の順位は、「介護施設」(37%)、「医療施設」(29%)、「冬期などの一時入居施設」(22%)、「高齢者向け賃貸住宅」(16%)、「若者向け賃貸住宅」(10%)となっている(図24)。設備の充実している病院に

行くには都市まで行かなければならないため、村に医療施設を希望する人が多いと思われる。

3.7.2 入居を希望する住宅・施設（複数回答）

「介護施設」（19 %）に対して入居の希望が多く、ついで「冬期の一時入居施設」（17 %）、「高齢者向け賃貸住宅」（13 %）である。（図 25）

この設問に関しては全設問中、無回答が最も多かった。これは、前項より介護施設が村にあることは望むが、できれば自分が入居せず、自宅での生活を続けたいと思っていることが推測される。

4. まとめ

高齢化率の高い島根県の中山間地域を対象に、高齢者の生活の現状、住環境、冬期の住まい方、ならびに今後の自立した生活づくりについてアンケート調査を行い、その現状と対応について考察した。下記にその結果を要約する。

- 1) 中山間地域の過疎地における高齢者は、一人暮らし、特に冬期の生活に対して、他の地域の人とは異なる様々な不安を抱えている。
- 2) 高齢者は一人暮らしの生活や介護が必要になった時のこと等、様々な不安や不便さはあっても、住み慣れた周囲環境、家、什器、菜園への愛着と、束縛されない自分の生活のリズムを大切に、現在の家に住み続けることを望んでいると推測される。
- 3) 村として、施設の充実をはかるのも必要な措置ではあるが、その前段階として、日常生活への援助をすることで高齢者の抱えている不安を少なくし、現在の家・土地にできるかぎり住み続けてもらうことが大切であると考える。
- 4) 子ども世代は、高齢者が施設に入居することで、自分達が出来ない介護を施設に代行してもらい、両親が安全に生活することを希望していると思われる。
- 5) 高齢者にとって介護施設に入居することは、従来の生活が一変し、日常行ってきたことが出来ず、生き甲斐、楽しみを失うことに繋がるなどの問題を残している。

なお、弥栄村には、2.1 で述べたように、地形の厳しい同村田野原地区（住民／6世帯 11人）に、高齢者が住み慣れた地域で自立し、助け合い、安心して暮らせるよう、地区の人が運営管理する共同住宅が建設されている。

この地区の多くの方が、随時利用できる共同住宅により冬期の生活が安心して送れるようになったと評価している。この共同住宅は中山間地域の過疎化対策としても

有効な一つの試みであると考えられる。

謝辞

本研究の調査に当たり、羽須美村、弥栄村の関係各位、ならびに各集落の役員の方々にご協力いただきました。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 羽須美村誌編集委員会 羽須美村誌(下巻) 昭和 63 年 3 月
- 2) 弥栄村誌編纂委員会 弥栄村誌 昭和 55 年 9 月
- 3) 総務省統計局 平成 12 年国勢調査報告 第 2 巻、その 2 都道府県・市区町村編 32 島根県 平成 13 年 10 月